零夜の奇妙な転生

ブラックファントム・ゼロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零夜の奇妙な転生

【Ｎコード】
Ｎ４０２１Ｚ

【作者名】
ブラックファントム・ゼロ

【あらすじ】
ＶＲＭＭＯ中に小猫をかばってトラックに挽かれて死亡した平凡な少年、闇堂零夜（あんどうれいや）は剣と魔法の異世界『ザッハトルテ』に転生する。最強の最強転生者による、異世界転生のバイブルがとうとう開幕！！
※この作品は、人によっては読んで不快になるような内容、表現を多分に含んでいます。ジャンルをご確認の上、納得してからお読み下さい。また、この作品は元々『天啓的異世界転生譚』の作中作であり、ブラックファントム・ゼロは架空の作家です。

登場キャラクター紹介（前書き）

本作のジョバンニ出てきた人物の紹介です。
魅力的なキャラクターの数々をお楽しみください。。

登場キャラクター紹介

『闇堂零夜（あんどうれいや）』

本作の主人公であり、作者の分身（ブラックファントム・ゼロ）。
テンプレな転生イヴェントを減て、剣と魔法の世界『ザッハトルテ』に転生する。

能力地だけを見れば少ししか最強ではないが、その扱い方が尋常ではないため最強の上の最強くらいに最強になっているのだった。
性格はいつもなら温厚だが、逆らう奴には容赦はしない。人格的にも素晴らしく、温厚だが奴隷や悪徳商人や腐った貴族を許してはおかない正義漢の持ち主。

本当の実力なら既にＳＳＳＳ級（超特ＳＳＳ級。超上級魔神レベル）をも凌駕する力を持っているが、あまり目立ちたくないのでＥＥ一級（超最弱。弱すぎて逆に目立ちまくるレベル）の冒険者ということで世をしのぶ仮の姿である。

また、これは秘密の設定なので言うことはできないが、実は今回以外にも九回の転生を経験し、『神殺し殺し』などの異名を持つが、その記憶は『九の世界（ナイン・テイル）を支配するモノ』によって封印されている。
しかも、彼はまだ二回の転生を残している。

『リスティーナ・スメラギ・ティーアリーエ・ナイティンゲイル』
実は某国の王様の一粒種で、第一王女であるが、夜みんなが眠くて

油断している間にさらわれて奴隷にされてしまった。
読者の間では、「実は姉妹がいる」とか、「血は繋がっていないが姉的存在ならいた」というデマゴギーが流行っているが、かなりの事実無根である。

前述した事情によって、悪徳奴隷商人につかまっていたが、零夜に助けられてからは零夜に一生ついていく決意を固めた。
清純な性格と兼ね備えられた容姿を持っているが、時々嫉妬深い一面を見せることも・・・・！？

その有能でどこにでもついていく正確からか、ファンの間では『ノーパソ王女』なんて呼ばれているらしい。
その名前のセンスはどうかと思うが、沢山の人に気に入られてもらって何よりです。
アリガトー！！

『ヘルマーン・ンジャーメイナ・タルマーン・イルマーン』

零夜の生涯のライバルで、凡人の想像を絶するほど邪悪な魔法使い。
奴隷商人のふりをして悪事に勤しんでいた所を零夜に邪魔をされ、それから零夜を変質的に恨み、狙うようになる。

ちなみに名前の構成要素が似通っているように見えるのはよくいわれるごろ合わせのために無理やりとかではなく、彼の故郷では同じ発音を繰り返すことで魔術を強化できるというおどろおどろしい迷信のせいなのでまったく無理やりではない。

『エイファシア・ルクストール・ファラウェイ』

どう見ても二十一歳にしか見えないが、実は町名なエルフのため、実は１万二千歳。
一般人に身をやつしていたが、零夜の素晴らしすぎる人格に挽かれて彼の仲間になることを決意する。

得意魔術は闇精霊を使役した超光魔法。
魔法に秀でたエルフの仲でも闇精霊を使って光魔法を使えるのは彼女だけで、エルフからは全面的に非常に尊敬されているが、エルフの仲でもくずなやつらにはつまらない嫉妬の所為で憎まれている。
その魔法の腕は超一級品だが、本人は超一級品であることを隠している。

『暗黒の宰相ジャアーンクール』

普段はいい人ぶって笑いながら近付いてくるのでいい人だと思われがちだが、その中身は実に腹黒い。
零夜も最初は騙されそうになるが、零夜は頭がいいので初めから全く騙されなかった。
自分のことしか考えておらず、いつおすごく悪だくみなことか、エッチなことばかり考えている。
好物は焼きビーフンだが、最近カレーにもはまっている。

『ダークネスオブシャドウドラゴン』

最強の暗黒流。
凡人であればその姿を見ただけでショック死してただちに絶命する程度の強さ。

ゲーム世界では零夜意外のすべての存在を須らく恐怖に痺れさせる恐ろしい敵だったが、その敵はさらに恐ろしい力を備えて転生世界で零夜を待ち構えていた。
とある事情から零夜はこの暗黒龍と戦うことになるが、その凄まじい暗黒の闇ブレスに苦戦を強いられる。
戦闘に勝利してからは零夜に隷属する忠実な使い魔になった。

『惨殺の白猫将軍（オールキルマジャンコ）』

いつも顔も隠す全身鎧をミニ着けているため、性別すら謎で、彼女が男なのか女なのかすら、まだ謎に包まれている。
全ての生き物を残虐に殺す残虐さから全ての生き物に嫌悪されているが、実は猫には優しいので猫になつかれる。

全身鎧の胸元がふくらんでいることから、巨乳美女か相撲取りなのではないかとまことしやかに噂されているが、彼女が兜を脱ぐ瞬間まで誰にも彼女が美女だとは想像もできないだろう。
読者の人も、彼女の正体が明かされた時は驚くことはうけおいである。
恐ろしそうな外見に見えるが、実は・・・？

転生1．宇宙最強の最強転生者！！

≪ＳＩＤＥ零夜≫

おれ、闇堂零夜（あんどうれいや）は今日もＶＲＭＭＯ『ナイトキング・オブ・ワールド』をやっていた。

「チッ！！雑魚どもが！！」

おれは自分のキャラ『ゼロ』を操作して身のほどしらずにもおれにＰＫを挑んできたプレイヤーたちをけちらした。

ＰＫしてきたプレイヤーたちのレベル１５０。これはかなりのレベルの高さだ。

『ナイトキング・オブ・ワールド』は指数関数的にレベルアップの大変さが代わるため、レベル０から５０まで上げるより、５０から１００。１００から１５０まで上げる方がずっと大変だ。それは大体１００倍くらい大変だといわれている。

悪漢プレイヤーたちはわざと初心者ダンジョンの近くを歩いていたおれを見つけると、

「へへッこいつレベル１じゃねえかやっちまえ！！」

「武器全部とあり金おいていけばたすけてやるぜヒャッハー！！」

いきなり襲ってきて問答無用だったが、それはおれの思うつぼだった。

なんと、おれのキャラはキャラレベルが最高の２００にならないとできない転生をもう１０回もやっているのだ。

転生１回で能力値が５００レベル分くらい上がるので、レベル１でもおれの能力値は５０００レベル相当ということになる。

それでもおれの職業が太陽戦士でなければ逃げられたかもしれない。だが、太陽戦士なので到底無理だ。
おれが太陽戦士なれたのは、ほんの偶然だった。。

なんでも後で聞いた話によると、太陽戦士になるには下級職である戦士を最高レベルの２００まで上げた後、一日のうちにランダムでほんの一秒の百分の一の間だけある太陽が黒くなる瞬間に太陽を見た人だけが太陽の戦士へのクラスチェンジ資格が与えられるらしい。
そもそもおれのほかに戦士なんて下級職をレベル２００まで上げたやつはおれ意外にいなかったし、あとから太陽戦士のクラスチェンジ条件を知った奴がおれの真似をしようと戦士をレベル上げしたがぜんぜんダメだったらしい。
それはやっぱりおれが偶然経験値が１０倍になる指輪と戦士でも装備できるＳＳＳランクの剣を手に入れていたことが大きい。
この二つが偶然手に入ってなかったらおれだって戦士をレベル２００まで上げることはとても無理だったので本当におれは幸運だった。

それに、太陽の情報も幸運だった。
太陽戦士というくらいだから太陽を見るとクラスチェンジできるんじゃないかとひそかに思っていた（これを思いついたのはやっぱりおれだけだったらしい）おれは、フィールドを歩いている時でも戦闘中でも三秒に一回くらい太陽を見上げるようにしていた。
おかげで視点移動のコツがわかったのも思わぬ収穫だ。
やっぱりいくらキャラクターが強くても、プレイやースキルが低いとどうにもならない。その点おれはプレイヤースキルも高かったので視角はない。

特にこの『ナイトキング　オブ　ワールド』（正式名称は『ｎｉ

ｇｈｔｋｉｎｇ　ｏｆ　ｗｏｒｌｄ』）はさすがに『騎士王の世界』というだけあって、ほかのステータスさえ高ければ勝てるＶＲＭＭＯと違って、特に剣とかの駆け引きが大事になるため、プレイヤースキルがないとレベル１００のキャラでもあっさりレベル１のキャラに負けたりする。

まあおれレベルになるとそんなことはなくなにもしなくても負けないが、おれはプレイヤースキルをみがいているので、たまにおれを偶然と運のおかげで太陽戦士になれただけの雑魚だと思う奴はおれの剣さばきを見てこしを抜かしていたこともある。

そんな色々な幸運とみがきつづけた実力のおかげで太陽戦士に転職できるとなったときはおれも手が震えた。

そして、ソラウルという太陽戦士転職用の隠れＮＰＣを見つけて、実際に転職してみて、まるで太陽のような黄金の装備、まるで太陽のように光り輝く自分の姿をみて驚いた。だがもっと驚いたのは太陽戦士になったあと、雑魚と戦ってみておれはまた驚いた。

なんと太陽戦士レベル１は戦士の上級職である騎士のさらに上級職である聖騎士のレベル２００より強かった。

しかもオリジナル技『太陽の華（サン・フラワー）』はその場にいる全員に一斉に攻撃する上に普通の技の２倍以上の攻撃力を持っていたので、ＰＫしたやつらは一瞬だった。

「うそだろなんでレベル１でこんな・・。」

「あ・・ありえない・・・・。」

「うわあああ・・・化け物だーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

死ぬ時の光るエフェクトをのこして悪党プレイヤーは死んだ。

本来なら絶体絶命の状況を生き抜いたのにべつに達成感はない。

「つまらないな・・・。」

むしろ胸にぽっかり穴があいたような虚無感があるだけだった。

悪党どもが死んでアイテムを落とす。
さすがに１５０までレベル上げしているやつらだからそれなりの装備をたくさん装備していたのでそれを落としていた。
それは普通のプレイヤーだったらひとつ取っただけで興奮して夜眠れなくなるほどのすごいものだったのだが、
「つまらないな・・・。」
おれはそんな物には興味がなかった。

おれの持っている装備は全部ＳＳＳランク。しかもＳＳＳの中でもさらに一番貴重だといわれるアイテムばかりだ。それを知り合いの鍛冶屋に頼んでＳＳＳ級の魔法石で強化している。
普通ＳＳＳ級の鍛冶はなかなかうまくいかないのだが、おれの時は幸運にも３０回連続でうまくいった。
知り合いの鍛冶屋もこんなことは生まれて初めてだすごいといっていた。
だから、ほかのやつらならともかくおれはいまさらレベル１５０のアイテムを手に入れてもゴミとしか思えなかった。

しかたないのでその高価なアイテムを特に身もせずに全部のアイテムをインベントリにしまうと、街にもどって店に行った。
「全部換金で」
そういったら隣でアイテムを見ていた女戦士が、
「えっ！！これすごいレアアイテムよ！！売り物じゃなかったらわたしが欲しいくらいよ！！」
「じゃああげるよ。」
「えっそんな悪いわ！！よく知りもしないのに。」
「でもおれは本当にいらないんだ。ほら。」
ちょっと迷ったがおれは自分の装備欄を見せた。

「すっすごい！！全部ＳＳＳ級アイテムじゃない！！しかもこの聖真龍王の剣ってもしかして、あのイベントで一本だけしか出て来ないっていわれているあの・・・！？」
女戦士が騒ぎ出してまわりがざわざわとしはじめた。
これはまずい。
「ごめん。おれ太陽戦士だからめだちたくないんだ。」
「えっ！？太陽戦士ってあの伝説の職業でいままでに一人しかなれたことがないっていわれているあの・・・！？」
「とにかくそういうことだからあげるよ。」
おれはすぐに装備欄をとじるとお姉さんにアイテムをわたした。
お姉さんはもっとおれの装備をじっくり見たかったようだがおれはあまりめだつのは好きじゃない。
不満そうなお姉さんと別れておれは外に出てログアウトした。

「つまらないな・・・。」
現実の退屈さを忘れるためにやったはずの『ナイトキング・オブ・ワールド』だったのに、あまりに強くなりすぎて張り合いがない。
トッププレイヤーが六人がかりで行って一発もダメージを与えられなかったという最強のあん黒龍『ダークネスオブシャドウドラゴン』ともソロで戦ったが、こっちが一発軽く攻撃しただけで死んでしまった。
本当は喜ぶところだが、最強といってもこんなものかとおれはぎゃくにがっかりしてしまった。
かといって違うキャラを作って最初からやったり別のゲームをするのも気が乗らない。
おれがゲーム機の前でボッとしてると、
「な、なんだ！！？」

とんでもないことがおこった。

突然おれの家の壁やぶってトラックが突っ込んできたのだ。

おれは持ち前の反射神経であわてて逃げようとするが頭に『ナイトキング・オブ・ワールド』用の装置をつけていたせいで動きがにぶった。

だがおれの反射神経のレベルならそれだけならなんとか逃げられた。

だが、目の前には飼い猫の子猫がいた。

このままではおれだけなら逃げられても子猫だけなら死んでしまう。

おれは考えるより先に子猫をかばってしまっていた。

「うわあｗｊｆｗヴぁｗｊふぃじゃ；！！」

途中から自分でもなにをいっているのかわからなくなってしまった。

それぐらい痛かった。

（ああ。おれは死ぬのか・・・。）

おかしなことだがくやしさはなかった。

むしろそれよりおれは子猫を助けられたことに満足しながら、おれは闇の中に堕ちていった。

気が付くと雲の上にいた。
どうやら天国のようだ。

「チキショウッ！！　ＶＲＭＭＯ中に子猫をかばってトラックにはねられて死亡なんてなんてテンプレだよ！！」
おれはくやしさをおさえきれずに怒鳴った。
おれだってそういう物語を読んだことはあるが、自分がまさかそんな悲愴な運命に巻きこまれるとは思ってもいなかった。
テンプレなんていって悪かったなと昔の小説の主人公たちにおれは謝った。

するといきなりひげの爺さんがあらわれた。
「すまなかったのう。お前が死んだのはわしのミスなんじゃ。」
爺さんはいった。
「ちょっと隣にいた死ぬ予定のやつがいたのじゃが、ちょっと死ぬファイルの操作をミスっての。かわりにお前を殺してしまったのじゃ。てへｗ」
てへｗじゃない！！
おれは爺さん、いやクソ爺に怒りがこみあげてくるのを感じたが、冷静に冷静に、と自分の怒りをおさえた。

「じゃあおれが死ぬのは予定外だったってことですか？」
「そうじゃな。むしろお前は２００歳近くまで生きて寿命で死ぬ予定じゃったらしいがわしがミスったせいで死んだ。」
「えっそれじゃああなたは誰なんですか？」
おれは本当はわかっていたがたしかめるために聴いた。
「ふふふ！！わしは神じゃ！！人間の命の管理もわしがやっておる

！！」

クソ爺、いや、クソ神様が胸をはっていった。

その時おれはわかってしまった。

神というのは人よりもずっと強い力を持っている。だから人の痛みがわからないのだと。

おれはいつも弱い者にもやさしい気持ちを持つように自分で気をつけているが、こいつは自分の力に頼るばかりで弱い奴の気持ちを考えようともしない。

「なんじゃ？反抗的な態度じゃのう？お前を地獄に落としてやってもいいんじゃぞ？」

クソ神様が気分が悪くなるようなネコナデ声でいった。

普通の人間だったらここで土下座でもして鳴いて誤る場面だっただろう。

だがおれはそんなことはできなかった。

「神様なんていってもこんなものか・・・。

つまらないな・・・。」

口からつい、正直な気持ちが出てしまった。

「なんじゃと！？いまお前はなんといった！？」

（しまった・・・。）

おれは自分が闊達（うかつ）だったと悟った。

クソ神様は怒り狂った。

「ちょっとは見どころがあると思ったが所詮は人間か！！わしのように力を持たない下等な生き物にはわしのすばらしさはわからないなそうだ人間など全部滅ぼしてやろうか！！」

「なんだとっ！！」

おれはクソ神様の目を見た本気だった。

（こいつ本気だ・・・！？）

おれは恐ろしくなった。こいつは本気だった。
本気で単なるひまつぶしで人間を全て滅ぼそうとしているとなぜかおれにはわかった。

「まずはお前をアッ！！」
クソ神様はまずおれを倒そうとしたが、それは遅すぎた。
そのときおれは目に見えないほど速く、いうなれば疾風や台風よりも早く動き、クソ神様の二の腕の関節を決めて動けなくしていた。

「なっなんだと・・・！？」
「思ったとうりだな・・・。」
クソ神様は必至でおれの腕から抜け出そうとするが、そんなことはできない。
いくら神だとかいってもちょっと不思議な力が使えて世界を創ったり壊したりとかできるだけで、しょせんは戦いの素人。
本物の戦場にいて敵を数千人以上殺して黒い死神と呼ばれたおれのスピードにはついてこれなかった。

「な、なにがおこったんじゃ・・・。
お、お前！！お前はただものではないな！！いったい何者じゃ！！」
「なんだそんなことか。つまらないな・・・。
おれはちょっと昔傭兵をやっていただけの、ただのどこにでもいる平凡な少年だよ。」
おれはそういって二の腕の関節に力をこめた。
「う、うわあああ！！やめてくれ！！いや、やめてくださ・・・やめてくだしゃい！！」
クソ神様はすぐに根をあげて悲鳴をあげた。
おれは拷問術にもすぐれているので普通の１００倍の痛みがあるはずだった。

「もうおれにひどいことしないか？」
「はっはいしましぇん！！」
「約束をやぶったらひどいぞ！？」
「ぜっぜったいやぶりましぇえん！！」
クソ神様が泣き叫んだ。ここまでやれば大丈夫だろう。
さっきまでえらそうな態度をとっていたクソ神様が泣き叫ぶのをみておれはすっとした。

「じゃあすぐおれをもとの世界にもどせ」
「そっそれはムリでしゅ！！」
「なんだと！？」
おれはおもいきりクソ神様のひげを引っ張った。
力を入れすぎたせいか、神の頭が地面にめりこむ。
ざまあみろだ！！

「本当のことをいえ！！うそをつくと承知しないぞ！！」
おれはさらにクソ神様の頭をふみつけにする。
神様の頭をふみつけにできるなんて、おれくらいの実力者くらいしかいないだろうにちがいない。

「む、ムリなものはムリなんでしゅ！！一度死んだ魂をもとの世界にもどすと因果の流れが狂っておそろしいことが起こるでしゅ！！最悪時空が崩壊して世界が大変なことになるでしゅ！！」
「じゃあおとなしくおれに死んでろっていうのか？」
「ほかの世界なら大丈夫でしゅ！！もちろん零夜さまなら記憶とか姿とかをそのままでマンガの主人公みたいなチートな能力をたくさんつけてゲームの世界に送ることだってできるでしゅ！！」
「ゲームの世界に・・・。」
クソ神様のやつは気に食わなかったが、ゲームの世界に行けると

いうのは魅力的だった。
ただ、だまされていたりする可能性もあるのでもう一回だけ確認する。
「つまりおまえは下手すれば世界を滅ぼしかねないレベルのチート能力をわたしたり好きなゲームの世界に送れるほど全能なのに、因果の流れとかなんか事情があるからおれをもとの世界に生き返らせることはできないってわけだな！？」
「はっはいそうなんでしゅ！！だからころさないで！！」
「チッ！！」
こんなやつ殺す価値もない。
おれは神のひげをぶちぶちちぎってから、神を開放してやった。

「ありがとうございましゅ！！ありがとうございましゅ！！」
ゴミがなにかをいっていたが、聞く価値もない。
本当はこんな無能な神なんて殺した方が世界のためかもしれないと思ったが、いくらおれだって死んでから生き返る術（すべ）なんてしらない。おれのためになるから生かしてやっただけだ。

「しょうがないな。異世界に行ってやる。」
「ほ、ほんとでしゅか！？」
「ああ。そのかわり、色々選ばせてもらうぞ。」
「も、もちろんでしゅ！」
さて、ではどうするか。
これからの一笑にかかわる問題だから、慎重に考えなければいけない。

「よし決めたぞ！！」
まず、当然行くのは『ナイトキング・オブ・ワールド』の世界、『ザッハトルテ』だ。

剣と魔法の世界『ザッハトルテ』。おれの新しい世界にふさわしい勇壮な名前だ。
「それと、能力についてだが・・・そうだな。
まずおれが使ってたデータのキャラの能力をおれにコピーしろ。
あと、この状態から年をとらないようにして、二つの職業を同時につけられるようにして、経験値を１００倍に、成長限界も外せ」
「そっそれだけでいいんでしゅか！？」
条件をいったら驚かれた。
どうやらおれはほかの転生者に比べてずいぶん良心的だったらしい。

「ほ、ほかのチート転生の人たちはひどいでしゅ！！
マンガの能力全部とかバ〇スっていったら魔王城が壊れて魔王が死ぬようにしろとかそもそも神様の力を全部よこせとかチートすぎでしゅ！！」
「それはひどいなｗｗ」
おれはおもわず失笑がもれた。正直理解ができない。そんなに強くなってどうするつもりなんだろうか。

「おれは成長する余地がのこっている方が好きなんだ。
簡単にどんなやつでも倒せたらつまらないからな。」
簡単に手に入るものに価値なんてない。
最初はよくても、すぐに力を悪用して悪の道に走ってしまったり、強過ぎる力を使いこなせずに破滅してしまうのがオチだ。
おれはそれをよくしっていたためそういう失敗はしなかった。

「さっさすがでしゅ！！ただ強いだけじゃないでしゅ！！」
クソ神様がおれを尊敬の目で見ていた。
男にそんな目で見られてもちっともうれしくない。
「さっさと転生しろよ！」

「はいでしゅ！！」
最初とは全く正反対になった立場におれは笑いながら、おれは転生した。

「ここはどこだ・・・。」
転生をすると、おれは見知らぬ場所にいた。
自分の格好を見てみると、漆黒の鎧に漆黒の小手、どうやら無事にゼロの装備をひきつぐことができているようだった。

「しかし街がどこにあるかもわからないしどうしようか」
おれが突然の異世界のことにとまどっていると、

「キャーーーーーーーーーー！！！」

どこかから女性の悲鳴が聞こえた。
「あっあれは・・・！？」
悲鳴が聞こえた方を見てみると、逃げているみすぼらしい身なりの女の子ふたりを馬車に乗った太った男たちが追いかけていた。
ここで素人ならすぐに助けにいくところだが、もし女の子たちが悪の手先だったらおれは悪者になってしまう。
「このやろう！！お前みたいな奴隷が、この貴族で奴隷商人のオレ様から逃げ出すなんて１００年早いんだよ！！」
そこで豚みたいなバカ貴族が大声を出してくれたおかげで、すぐに事情を理解することができた。

助けに入ろうと決めたところで、豚貴族が腕を振り上げた。
「あっまずい！！」
おれはそう思ったが、どうしようもなかった。

豚貴族はもう武器を振り上げ始めているし、馬車との距離はまだ30メートル以上ある。
ゲームキャラのゼロとなったおれの身体能力なら光速を越えて移動することもできるが、いまのは完全に間に合わないタイミングだった。

バサッ！！という音がして女の子のひとりが倒れる。
距離があったのでよく見えなかったが、視力が5．0のおれの目には見ただけで即死だとはっきり見えた。
「おねえちゃん、いやーーーーーーーーー！！」
もうひとりの女の子が悲鳴をあげた。

「くそっ！！」
おれは危険もかえりみずに飛び出すと、女の子の前に立った。
「お前たちはいったいなにをしているんだ！？」

突然でてきたおれに、当然豚貴族たちは驚いた。
すぐに豚貴族が勝手な言い分をまきちらす。
「こいつらは奴隷なんだよ！！おれは貴族でそいつらの持ち主なんだよ！！」
「ちっちがいますこいつらは無理矢理わたしたちを街からさらって・・・！！」
「うるせえ黙れ！！」
「きゃぁっ！！」
また豚貴族が女の子を剣の腹でなぐる。
おれが女の子の前に立っているのにその目の前で馬車の上からそんなに長くない剣の腹で女の子をなぐるなんて・・・。
位置関係を無視した豚貴族の最低な行為に、おれの怒りはもう有頂天だった。

「とにかくやめろっ！！」
おれは豚貴族の剣をつかんだ。
「なんだお前さからうのか！？おれの父親は伯爵だぞ！！」
みえみえな脅しだった。
だがそんなみえみえの脅しに屈するおれではない。

けれどこんなやつでも先に手を出したらおれが悪いことになってしまう。
おれは耐えた。
戦うだけで問題を解決するのは二流のやることだからだ。
「とにかく事情を聞かせてください。二人の事情をくもりなき眼（まなこ）で見定めて正しいほうに味方します」
「えっ？」
奴隷の女の子が驚いて声をあげた。
まるで荒野に咲く一輪の花のようにかわいらしい声だった。

「相手が貴族だというのに奴隷の言葉を聞いてくれるだなんて・・・。」
なにかぶつぶついっているがよく聞こえなかった。
おれの悪口じゃないといいんだが。
いや、この子はそんなことをする子じゃないな。
おれはすぐに反省した。

「そんなことしったことか！おいこいつもやっちまえ！！」
無視されて怒った貴族が命令した。
馬車のうしろからごつい男たちが何人も何人もでてくる。
「キャー！！にげてえっ！！」
女の子が叫んでいるがおれはにやりとふてぶてしく笑った。
「いいんですか？・・・ぼくに手を出したら・・・・・死にます

よ。」
おれは剣に手をかけながらそう忠告したが、
「かまわん！！いけー！！」
男たちはかかってくる。
しかも、男のひとりが鑑定スキルを持っていたのか、さけんだ。
「ギャハハハ！！こいつレベル１だぜ超雑魚だ！！」
「そんなっ！？にげてえっ！！」
女の子が全部の希望をなくして悲しそうなのに叫ぶ。
自分の身があぶないのにおれの心配をしてくれるなんてなんて純真無垢な人なんだ。おれはすごく感動して助けよう思った。

「なんだおまえ最低レベルじゃねえかおどかしやがって！！」
少しびびっていたほかのやつらもおれにかかってきて、女の子が目をつぶる。
しかし、
「バッバカな・・・。」
男たちの攻撃は、おれにかすり傷ひとつ負わせることができなかった。
男たちの武器はおれの体の表面で止まっている。
あまりの防御力のちがいに攻撃がまったくきかないのだ。
「これでも最低レベルですが（笑）」
そういって、おれは攻撃してきた男の剣を指一本でつまんで折ってみせた。

それを見た男たちは、
「うそだろなんでレベル１でこんな・・。」
「あ・・ありえない・・・・。」
「うわあああ・・・化け物だーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」
といって逃げようとするが、それはおれが厳密にゆるさない。

「おかえしです！！くらえ！！」
おれが闇よりも濃い漆黒の剣を振るうと、
「ぎゃーーーーーー！！」
「いてえいてえよ母ちゃんーーーーーーーーーーーー！！」
「ゆるしてくれなんでもするゆるしてくれーーーーーーーーーーーー！！」
男たちは数秒の長い悲鳴をあげながら一瞬で全滅した。

おれは用兵時代に数千人も殺して死神と呼ばれたが人を殺したのは始めてだった。
だがこんなやつらは死んで当然だった。
だからふつうだったら人を殺したら罪悪感とかが大変だが特になにもかんじない。
「あ、あわわわ・・・・・。」
あとにのこった豚貴族は馬車の上で失禁していた。
「きっ貴族にさからうのかそんなことしたら・・・。」
「そうですか。おれはべつに手を出すなんていってないのに一方的に手を出してそっちがやられるとか笑えますねw」
「しっしまった・・・。」
豚貴族は顔を蒼白にした。
自分から手を出していないのだからおれは正当防衛だ。
そのことに気付いて豚貴族は顔を蒼白にしたのだ。

「まっまて！お、おれはえらいんだぞ？！おれの父親は貴族で・・・ひぃっ！！」
おれが剣を突きつけると豚貴族が豚みたいに鳴いた。
「それはべつにお前がえらいわけじゃなくて父親がえらいだけだろ？かんちがいしてるんじゃないですか？それにおれはお前の父親の権力なんてこわくないですしww」

そのまま剣を突き出すと、
「ぶひぃ！！」
豚貴族は気絶した。
「当たってないぜ。ただのみねうちなのに気絶するとかバカみたいだなｗｗｗｗ」
おれは剣を寸止めしていた。
ふつうの剣士なら簡単ではなく難しいが、おれくらいのレベルなら簡単にできることだ。

小便をちびったまま気絶した豚貴族を放置して、おれは少女のほうに向かう。
「大丈夫かい？」
そうしておれはやさしい笑みで自分が助けた奴隷の少女のところに歩いて行った。
無理矢理奴隷にされて奴隷商人にひどい目にあわされてほんの数分前に目の前で姉を殺されたばかりの少女に、返り血を浴びた黒づくめのおれが歩いて行ったらきっと怯えさせてしまうと素人なら思うだろう。
だが、おれの持つ雰囲気を読み取ったのか、少女はすなおにうなずいた。

（か、かわいい・・・！！）
よくみるとみすぼらしいかっこうをしていたが、少女はどこかの国の王女だといっても信じられるくらいかわいかった。
そのせいで、おれはよく妹にしていたみたいに頭をなでてしまった。
「あっ・・・。」
「わっ悪い。いやだったか？」
こわがらせてしまったかと思ってそう聞いたが、少女は首をマシ

ンガンみたいにぶんぶんと振った。
「お、王子様みたい・・・・ポッ／／／」
少女は小さな声でなにかいったが、おれにはよく聞こえなかった。
「なにかいったか？」
「い、いいえ、なんにも・・・・。」

これが裏切りと破壊と凌辱（りょうじょく）と血と臓物と畏怖と憐憫と侮蔑と嘲笑と尊敬と凌辱（りょうじょく）と非日常にまみれた地獄のような世界での最初のであい。
おれと、のちのおれの最初の妻となるリスティーナ姫との最初のであいだった。

転生2．王を超越する者

≪ＳＩＤＥ零夜≫

――チュンチュン。

あさ、すずめの泣き声で目を冷ましたおれは、
「お早う。リスティーナ。」
隣ではだかで寝ていたリスティーナをそっと口付けをして起こした。

「アッアン。おはようございますレイヤさま。」
いきなり農耕なキスを躱されて、リスティーナはびっくり仰天して体を起こしたが、じぶんが全裸だったことを思い出して、はずかしそうに体をかくした。
おれははじらうリスティーナを見て、夕べあれだけのことをしたのに、まだはじらうなんてはじらいが残っていてかわいいとおれは思った。

あれからおれたちは気絶した奴隷商人を起して脅して蕎麦にいた奴隷の少女、リスティーナの所有権を脅し取り、最寄りの町にいくことにした。
えっ奴隷商人？　もちろん放置ですよ。
身ぐるみ剥いで置いてきたから、今頃魔物のエサじゃないですかねｗｗｗｗ

最寄りの町についたおれたちはとにかく疲れていたので宿を取る名案をおれの提案でおもいついた。
おれはリスティーナにも一部屋をとってあげようとおもったのだ

が、
「ど、奴隷がひとり部屋をとるなんてとんでもないですッ！！」
といわれたのでおなじ部屋を宿にとった。

しかしすごく美人なリスティーナといっしょの部屋にいたらいくら針山のうえで寝る人よりガマン強いといわれたおれだってガマンできない。
だが結論からいうとおれはガマンする必要なんてまったくなかった男と女がおなじ部屋に宿をとったわけだからリスティーナも覚悟はあったのだ。
「れ、レイヤさまになら・・・／／／／」
といったのでおれは全然ガマンせずにリスティーナを抱いた。。

リスティーナは当然処女だったが、おれは当然童貞などではなく、百戦錬磨でとてもうまかったので、
「アッアン、こんなのはじめて・・・。」
といってリスティーナはあえぎまくった。
それからリスティーナを何百回も絶頂させ、寝むったのはほんのついさっきだった。

「そうだ。リスティーナ。これを着るんだ。」
リスティーナのまえの服はもうすりきれてボロボロだったしほとんどの場所がボロボロだったので、きのうの夜ぬがせたときにぜんぶ捨ててしまったのだ。
だから変わりにおれはゲーム時代にもっていたアイテムからメイド服とりだしてリスティーナにわたした。
「えっこんないい服を？！」
おれがわたすとリスティーナ驚いた。
リスティーナの話では、ふつうこの世界では奴隷にあまりいい服

はふつうわたさないらしい。
しかしおれはそんなことは気にしない。奴隷だっておなじ人間なのだ。
それなのにひどい服を着せる人間の気がしれないしそんな人間はくずだ。やっぱりこの世界の人間たちはくずばっかりだとおもった。

しかし、おれがもっているのはメイド服。つまりメインのスカートがやたらミニなエプロンドレスに、装飾肩なホワイトプリムとオーバーニーハイソックスはあるが、下着のたぐいはもっていない。
ゲームでは中世設定ながら下着とかもちゃんとあったが、漫画とかではよく女性用下着売り場に男の主人公がいっしょにいったりするがあれは男としてどうかと思うのでおれはそんなものはみとめなかった。

「わるいな。これはイヴェントの報酬でぐうぜん手に入れただけだから下着はないんだが・・・。」
おれがもうしわけなくなっていうと、リスティーナは首をきつつきのようにはげしく横に降った。
「そっそんな・・・。こんなに立派な服をいただいたのに、下着まで貰ってしまってはわたしがこまっちゃいます！！」
「そっそうか。そういってくれると助かるが・・・。」
どうすればいいかおれは悩んだが下着はあげないことにした。

ここで空気の読めないやつならもうしわけなく思って下着を用意してしまうかもしれないが、そんなのは緒戦自己満足にすぎない。
自分のもうしわけなさをなくすために相手に物をあげるなんて本当のやさしさではない。
相手がこまるというのならあげないのが本当のやさしさなのだ。
それがわからないから日本人の悪いところだが、幸いおれは国という目線を超越していたので涙をのんで下着をわたさないことも造作

もないことだった。

「じゃっじゃあちょっとこれを着てみますね。」

そういってリスティーナが着替えると、おれは目をうたがった。

部屋に天使が光輪したのだ！！

いや、天使なんて生ぬるい。もはやリスティーナの美しさは天使なんて美辞麗句では表現不可能な形而下の事象に過ぎないと言っても過言ではないだろう。

メイド服を来たリスティーナは、まるで美の女神、この世すべての美と美貌を寄せ集めた純真無垢な天使そのものだった。

「どっどうですか？」

「すごいにあってるぜ。まるで美の天使みたいだ。」

「そっそんな！ほめすぎですよっ！！」

リスティーナはてれるが本当だからしかたない。

メイド服を来たリスティーナのかわいさはそこらのアイドルグループなんて相手にならないほどだった。ここが日本だったらすぐにテレビのトップアイドルにかけあがれるに違いないくらいのかわいさだった。

だがおれのリスティーナをテレビごしでも世の男どもが穢(けがれ)れた視線で見るのは不愉快だ。やっぱりここが日本じゃなくてよかったとおもうおれだった。

しかもリスティーナが来ているメイド服。ふつうのメイド服のような見た目にしか見えないが、じつはものすごい防御力と能力修正地をほこり、火と水属性への強い体勢があるだけでなく、水属性吸収効果と火属性無効科の効果までついているＳＳ級の装備である。

これをつけていればリスティーナがたとえまた悪漢たちにおそわれても安心だろう。

おれも愛用の漆黒装備に着替えてふたりで下におりると、
「ゆうべはおたのしみでしたねｗｗ」
と宿屋の主人にいわれたのでむかついたので反射的にぶんなぐっておいた。

「はっはずかしいです！！」
リスティーナはてれていたが、ゆうべは

「アッアン、キモチイイ！！　たまんない・・！」
「そっそんな・・・かっ堪忍してー！！」
「らっらめー！！　とんじゃうー！！」

とハデに叫んでいたので、バレてもしかたないかもしれない。

だがリスティーナにはずかしい思いをさせたのはたしかなので、宿屋の主人はもう一発ぶんなぐってからぜったいにしゃべらないように口止めして、金貨一枚をにぎらせておいた。
「えっこっこれは金貨？こっこれいただいてもいいんですか・・？」
「どうせはした金だからな。おまえにやるよ。ただしその変わりだれにもいわないでくださいよ」
本当はなぐっておしまいでもいいのだが、それだとこいつがなぐられたとか軍隊にチクるかもしれない。
軍隊相手でも負けるきはしないが、そんなことになったらリスティーナがこまってしまうだろう。

度量の広いおれは、金をわたしてこの話を解決する頭脳はの解決策を採用したのだ。
どうせゲーム時代の金貨がインベントリの中に１００００枚以上入っている。
１枚くらいは惜しくはない。

しかし、この世界の物価なら、あの金貨一枚で一般的な家族が一年間遊んでくらせるだけの金貨だろう。それをもらった宿屋の主人はいきなり土下座を始めた。
「あっありがとうございます！ありがとうございます！」
「ちょっちょっとやめてくれよ。はやく顔をあげてください」
こんな風に土下座をされたらおれがまるで悪者みたいだからおれはすぐに顔をあげさせた。

なぜ主人はこんな奇妙な行動をしたのか。くわしく事情を聴いた。
「じつは・・・。」
なんと話によるとこの宿屋の娘が病気になってしまって、高い治療費をはらわなくちゃいけないのに高すぎて払えなかったのでこまっていたそうなのだ。

ゆうべはおたのしみでしたねとかいうから余裕かと思っていたが、人生いろいろあるらしい。
もしかすると娘を救えない憤りが主人をゆうべはおたのしみでしたねに走らせたのかもしれない。
そう考えると主人にも校正の余地はある。

「ふぅんだったらこれではらえばいいじゃないか。」
「ははぁー。ありがとうございますぅぅ！！」
おれが金貨を押しやると、主人はそれこそ神様に向かって礼をするみたいな丁寧さな仕草で金貨を受け取った。
・・・こいつ、おれが神様ふみつけにしたって訊いたらおどろくかな？
そんなことをちょっと思ったがそれで今よりもっと尊敬されたりしてもウザいだけだからやめた。

土下座の店主に見送られ、おれたちは今度こそ宿のそとにでる。
「やっぱりいいことをした後は気持ちいいな。」
「はっはい！・・・やっぱりレイヤ様はやさしいかたです（ボソッ。
」
「えっなにかいった？」
「いっいえなんでもありません！！」
やっぱり何かいっていた気もするが、べつにいいか。

「うーんどうすればいいかまったく検討もつかない」
宿屋を出たのはいいが、これからどうすればいいのだろうか。
まったく検討もつかなかった。

「あっそうだ！なら冒険者ギルドにいけばいいんじゃないでしょうか？」
するとリスティーナがナイスなアイデアを出してくれた。
「そうか冒険者ギルドか・・・。」
おれも『ナイトキング・オブ・ワールド』では冒険者ギルドにはおせわになった。いや、むしろお世話していたといっても過言ではないほどの活躍ぶりをみせた。
世界でも１２人しかいないＳＳＳＳ級冒険者、『アーサーテーブルズ・トゥエンティ・ナイト』の一員呼ばれ（しかも自分で名乗ったわけではなくて自然とだれかが言い出した）、まともなプレイヤーからの尊敬と、くずプレイヤーからの嫉妬を受けていたのだ。まあそういうのはどぶの腐ったにおいがするからすぐわかって瞬殺だったが。
「よしじゃあ行くか」

「はいっレイヤ様っ！！」
そしてギルドに付いたので、おれたちはためらいもせずに扉を入った。

周り中から不躾な視線が集まってくる。
たしかにリスティーナはかわいいからしょうがないとは思うがほんとにウザい。
今すぐ呼吸を止めてくれないだろうか。

しかしおれが少しオーラを出すとそいつらは静まった。
戦うものは自分より強い人間を本能的に悟って戦わないというのは有名な話だ。野生動物くらいの知性はあるようだった。
おれは周りからの畏怖と恐怖と憐憫の視線を受けて悠々と歩き出して受付にいった。

「うわっ！？」
受付にいたのはすごい美人で胸の大きいエルフだった。
おれは人を外見で判断したりすることはまずないが、その胸の大きさにはちょっとびっくりしてしまったGカップはあるだろうか。日本ではまずお目にかかったことないレベルの巨乳だ。
リスティーナが歌って踊れるスーパーアイドルだとしたら、このエルフの受付は超グラマーなグラビアアイドルだろうか。どちらにせよすごい美人だ。

「何か御用でしょうか？」
そういった声もすばやらしく、とてもきれいな声だった。
「きれいだ・・・。」
だから思わずいっていた。
「えっ・・・？」
受付の人驚いて声をあげた。

「いっいやなんでもないんだそれより依頼を見せてくれ。Ｓランクでいい。」
「えっＳランクですって！？」
受付はお驚いていた。
なんだ？べつにへんなことはゆっていないが。

「カードを見てもよろしいですか？」
「あっああ。べつに問題はないが・・・。」
おれがカードをわたすとギルド員は、
「まっまさかっ！？いいえ、これは・・・！！」
と驚いたあと、
「あっこれ偽造じゃないのっ！！」
とんでもない濡れ衣をいい出した。

「なにをいってるんだ偽造なんかじゃないぞ！？」
もしや神様なにかトチッたかあのくずめとおもったが違ったらしい。
「いいえこれは偽造です！だって今はラングドシャ歴２３４年なのにこれは９８年ってなってるわ偽造じゃなきゃおかしいもの！！」
なぜかカードの年代がずれたらしい。
そういえばクソ神様に転生のとき、この世界とはいったが年代はいわなかったのが裏目に出たので正しく時代を選ばなかったのかもしれない。
やっぱりあのクソ神様次有った時ぶっ殺すとか物騒なことを考えていると、ギルド員が騒ぎ出した。

「カードの偽造は重要な犯罪よ！最低でも３０年は牢屋につながれて豚のような生活をするから覚悟しなさいよね！！」
「ちがうっ！！濡れ衣だ！！」

「言いわけは牢屋の中で３０年ずっとすることね！ガード！ガード！」
ギルド員が軍隊を呼ぶ。
このままだとまずい。

「くそっこうなったらしかたない。女に暴力をふるったりはしないが・・・。」
おれはしかたがないので力ずくでも説得することにした。
「ガード！ガー、むぐっ！」
金髪ギルド員の口をふさいで黙らせ、そのまま髪をつかんで、おくの部屋にひっぱっていく。

おれにつかまえられたギルド員がさけぶ。
「なっなにするつもり！？　あたしはギルド員なのよっ！？　そのあたしにこんなことしてただですむと・・・アッなにするのやめてッ！！」
たしかに冒険者ギルドには王国に匹敵する程の力があるとされているから、そんなギルド員に暴力を振るったなんて噂がたったら大変なことになるだろう。

だがおれはそういう権力に任せて人を脅す最低行為が許せないタイプの人間だったので逆効果だ。
「うるさいッ！！さっきからおれはなにも悪いことをしてない善良な市民をつかまえて勝手なことばかりいいやがって！！お前みたいに傲慢で他人を思いやることができないやつは、一度しっかり躾けてやった方がいいんだよ！！」
ギルド員は最初は威勢がよかったが、おれの迫力にようやく核の違いを悟ったのか、ふるえあがった。
「ひっひい！！やめてさっきのはウソよじょうだんなの！」

「いまさらそんなことが通用するなら警察はいらないんだよ！！」
「アッアア！！そんな・・・！？」
そして、おれはこんどこそおくの部屋にギルド員をつれこみ、

「アッアン、キモチイイ！！　たまんない・・！」
「そっそんな・・・かっ堪忍してー！！」
「らっらめー！！　とんじゃうー！！」

「もう生意気なこといわないな」
「アッアン、こんなのはじめて・・・。」
「おい訊いているのか！？」
「はっはいごめんなさい！！もうご主人様には逆らいません！！」
五分後、ひみつの『教育』をしてもどってくるとそのエルフの受付嬢はすなおになっていた。

まあちょっとやりすぎておれのことをご主人様と呼ぶようになってしまったがしかたないだろう。
そのときなんとなく隣のリスティーナの目が詰めたかった気がするが、気のせいだろう。

「あっあのもうしわけありませんご主人様！この冒険者カードは五年以上更新されてないからもう無効になってるんです！」
「なんだとっ！」
「ひっひい！ごっごめんなさい！わたしが命をかけてギルドマスタ

ーを説得してカード更新させますからゆるしてっ！ゆるしてくださいおねがいしますぅ！！」
おれはギルド員の（名前はエイファシアというらしいと聞いた）あわれな懇願を訊いて、怒りをしずめた。

あまいとは思ったが、エイファシアだって今は精一杯やっているし、何より美人に涙はにあわない。
「いいよ。」
「えっ！？」
「ギルドランクは最低のＥＥ－でかまわないから新しいカードを作ってくれ。」
「えっでもっそんなっご主人様っ！」
エイファシスはびっくりしたがそれは実はもっともなことだった。

ランクはＥＥ－からＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳ＋まであるが、上になればなるほどランクを上げるのは困難かつむずかしくなっていく。
それがＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳランクからＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳランクにランクアップするのは不可能ではないかといわれる由縁（ゆえん）である。

ＳＳＳＳランクはさすがにそれほどまでの難易度を誇りはしないが、ＡからＳになるのの１００倍、いや、１００倍の１００倍くらいはむずかしいのではないかと考えられている。
その為なら家族も友人も愛する祖父母だって裏切るやつらがくずだがいるだろう。
そのくらいのランクをおれは無言でどぶに捨てようというのだからこれはびっくりしないほうが驚くくらいの驚くべき出来事だったといえる。

「最初からはじめるのでもご主人様の実力なら試験を受ければＳランクからのスタートだって夢ではないのにそれなのに最弱のＥＥ－

ランクでいいんですか！？」
「ああ。めだちたくないからな」
おれはただでさえ太陽戦士ってゆうすごいクラスで目立つしリスティーナもかわいいから目立つ。
しかしおれはあんまり目立つのは好きじゃないのでそれは逆効果なのだ。

「ＥＥ一ランクなんて、子供でもならないスライムの一滴より弱いとされるランクですよ。こんなランクになったらきっといろんな人に馬鹿にされてしまいます。それなのにご主人様はそんな苦難の道を進むというんですか？」
「いや、いいんだ。それでやってくれ。」
最強から最弱への転落。上等じゃないか。

運命がおれをそうさせるなら、それにおれは抗ってみせる！！

「・・・わかりました。ご主人様がそうおっしゃるなら。」
エイファシスはそのときおれの覚悟をしっかり理解した様子だった。
すごく真剣な様子でおれに新しいカードを作ってわたす。

「あの、一応できましたけど、でも・・・。」
「いいんだっていったろ？まあその変わりすぐランク上げたいから、ランクＳの依頼とかをおれに優先してまわしてくれよな？」
「はっはい！もちろんです！」
やっぱり美人の笑顔はいい。その笑顔をおれが守ったとなればなおさらだ。

ふたりで笑いあっていると、急に横から殺気が感じた。

「イツマデ、フタリデ、ワライアッテルンデスカ？」
あ、あれ？なんでだろう？
隣にいるのはリスティーナのはずなのに、すさまじく汗が止まらない。
「サッサト、ヨウジ、スマセマショウネ？」
「「はっはい！！」」
おれたちはそろってすぐに返事をした。
・・・それにしてもリスティーナさん、ちょっとキャラ変わりすぎてませんか？？

「あっそういえば、ここらで悪徳商人のヘルマーンが指名手配されているのって知っていますか？」
「悪徳商人ヘルマール？」
「非道なことばかりする悪の商人です。でも、ものすごく強いAランクの取り巻きたちがいるから誰も手出しできないんです！」
「ふーん。世の中いろいろなやつがいるもんだな。」
しかしリスティーナの様子がおかしかった。真冬の野外でもないのにぶるぶる震えている。
「れ、レイヤ様。それって、わたしをつかまえた奴隷商人ですっ。」
「な、なんだとっ！！あのおれがぶったおしたやつらか！！」
おれは驚いたが、それ以上にエイファシアが驚いた。
「えっご主人様あいつらをやっつけたんですかっ！？」
「あっああ、そうだが・・・。」
あんな雑魚どもがAランクなんて嘘だろう。

全然歯ごたえなかったし。
まあおれが強すぎたという可能性もあるが。
「だっだったらついてきてください！！」
だがエイファシアは興奮するとおれのうでを取った。
それを見てリスティーナがむぅうとハリセンボンのようにふくれる。
おれも腕にすごい胸が当たるのでそれどころじゃなかった。
「どっどこにいくんだ？」
「王城です！！」
「「えっええーーーっ！！うそーーーっ！！」」

というわけで、いきなり王城につれてこられた。
何でも指名手配した理由は王様だから、倒したやつは王様に謁見できるらしい。
はっきりいって有難迷惑での何物もなかったが、エイファシスのためにもすっぽかすと面倒だ。
エイファシアはツンデレぎみだがかわいいし、王城に行く前に宿によってあの大きな胸で楽しませてもらったりしたしなｗｗｗ
「おっきなお城ですね。わたしお城って始めて入りました。」
まるでどこかの国のお姫様という隠し設定がありそうなリスティーナだが、王城に入ったりするのは始めてのようだ。初々しい感じが花蓮でいじらしかった。
だがおれは権力で相手を変えるなんてことはしない。
歩き方も実に堂々としたものだ。

腰がたたなくなったエイファシアの変わりの案内の人もひどく感心していた。

謁見の間にいっておれはまっさきにいった。
「ふぅん。あんたが王様か？」
周りから、
「なっ無礼なっ！」
「即刻獄門打ち首にしてやるぞっ！」
という声が聞こえたが無視する。

どうやらその程度の人間しかいないようだ。
「つまらないな・・・。」
そうおれは思ったからさっさと話終わらせようとした。

「あの商人の取り巻きを殺したのはおれだ。あと商人本人はその場に置き去りにしたぜ。じゃあもう用は済んだな行くぞ。」
そういって謁見の間に退出しようとおもったおれに声がかけられた。

「きっ貴様、この歴史あるベニエ王国の重鎮たちを前にして無礼千万であるぞ！
おまけにそんな薄汚い奴隷を連れて貴様は生きる価値もない奴隷と似たような存在だ！！」
それを訊いたおれは足を止めた。
「なん・・だと・・・！？」

だれがいったのかはわからなかったが、
「よくいった宰相サマ！」
「さすが宰相サマすばらしい！」

といったやつらからすると今いったのは宰相なんだろう。
見ると、やたら不細工な肥った男がそこにいた。
こいつが宰相だろう。

「今の言葉、すぐに取り消せ！」
おれは最大限の迫力をこめていった。
「なんだとっ？」
「リスティーナはおれの大事な仲間だ！そんな仲間を薄汚い奴隷だといったお前のくずな言葉を取り消せっていったんだよ耳が遠くなっちゃいましたかねー？」
最大限の侮蔑を込めていう。

「なんだとっ！そいつが薄汚い豚同然の最悪の奴隷という身分の女だというのは事実だろっ！帝政なんてするかっ！」
「・・・そうか。」
それを訊いてやっぱりおれは確信した。
身分だとか地位だとかは関係ない。やっぱりこの宰相はやっぱりくずなのだと。
くずほど身分だとか外見だとかばかりを気にして、まったく中身を見ようともしない！！

「なぁ。おまえに聞くが・・・。」
おれは底知れない核熱のマグマのような低い声でいった。
「オマエは、こいつみたいに肌がきれいなのか？」
「な、なにをいっている？」
そんなはずないのはわかっている。
宰相はひどい不細工で、肌だってぶつぶつだらけだ。

「オマエは、こいつみたいにつややかな髪をもっているのか？」
「きっ貴様・・・。」

絶句する宰相。
それはそうだ。宰相の髪は不潔な油でぎとぎとしていた。
「オマエは、こいつみたいに宇宙(コスモ)を映したみたいに神秘的な瞳を持っているのか？」
「う、うぐぐ・・・。」
宰相はとうとううめき声ひとついえずに黙り込んだ。
それはそうだろう。宰相の目は、豚のくずみたいなひどくにごった魚の目をしていた。

おれはとうとう抑え込んでいた怒りを爆発させた。
「お前らはこいつを奴隷だ薄汚いと罵ったが、この中でこいつよりも美人でかわいくて花蓮で美しいやつがいるっていうのか！こいつは奴隷だから劣っているんじゃない！外面だけを見て内面を見れないお前らのほうが本当は劣っているんだ！！」
おれの裂ぱくの叫びが響き渡り、
「れ、レイヤ様・・・／／／」
うしろでリスティーナがほほをそめた。

「く、ぅぅ。おぼえていろよっ！！」
悔しさが限界突破したのか、宰相は恥も外聞もなく逃げ帰った。
あとに残された重心たちはだれもが戸惑うだけで何もできなかった。

「やれやれ。国のトップたちがこんな様子じゃこの国も終わりだな・・・。」
そうやっておれが颯爽と帰ろうとしたとき、
「待たれよ！客人！」

一番の上座。天にまします玉座から、王が声をあげた。
この謁見の間にきてから始めて王様の声を訊いた。
以外とナイスミドルな声で渋かった。
だが、それとこれとは話がべつだ。

「待つ義理なんてない。本当はここであんたらを皆殺しにしてもいいんだぜ？」
それはただの脅しだったが、その場にいたみんなは本気だと勘違いしたのかみんな震えた。
だが王様だけは違った。

震えずに冷静になって支持を出した。
「あれを持ってこい！」
「しかしあれは・・・！」
「くどいぞ！わしが持ってこいといったらすぐさま持ってくるのだ！」
それで運ばれてきたのは・・・。

「あっあれはこの国に代々伝わる焼土下座という最大限の謝罪の意を示すときに王族が使う焼鉄板！！おやめください陛下！そんなことをすれば、陛下の前髪と額は・・・！」
「控えろ！客人に友誼をみせるためならば、私の前髪と額などやすいものだ！！」
そういって王様は熱されて湯気をあげる鉄板にむかって、土下座のポーズを始めた。

「本気なのか・・・？」
さすがのおれも、これには息をのんだ。
見ているだけで、あの鉄板の暑さははっきりとわかった。

あんなものに頭をこすりつけながら謝ったらただでは済まないだろう。

だが国王は、自分の所為じゃないのに自分の部下がやった不始末だからと鉄板に土下座して謝ろうとしているのだ。

並みの人間だったら絶対にこわくてできないことだった。

「馬鹿な宰相に変わってわしが謝罪する。本当にすまなかった。」

そういって、王様はゆっくりと頭をさげる。

そして、その額が焼鉄板につきそうになった瞬間、

「アッ・・・！」

細いが力強く盛況さを感じる手が、その頭を止めた。

その手のもちぬし、それはもちろん、

「れ、レイヤ殿・・・。」

おれだった。

おれは国王が本当に焼土下座してしまうという瞬間に、秘儀テレポートワープを駆使して王様のもとに殺到、その顔を上げさせて窮地を防いだのだ。

「顔をあげなよおっさん。なんというか、感動しました。あんた漢（オトコ）だよ」

この、単なるＥＥ一ランクの冒険者と、ベニエ王国国王の巡り合（出逢）い

い。

これが世界を変える一瞬の分岐点だったとは、神すらもまだ想像すらもしてもいなかったのだった。

転生3．ｖｓ最強のあん黒龍との対決！！　その１

《ＳＩＤＥ零夜》

――焼土下座の阻止。

おれは常人ならほとんど無理なことだが、おれにはたやすいことだった。

王様は危機一発をとめてくれて、おれを感謝のまなざしで見た。

「あっありがとうきみは心優しい若者じゃ！」

「やめてくれっ！おれは尊敬できる漢を助けるという自分の目的のためにやっただけなんだっ！」

おれは人格的にはどちからというと温厚の部類に入るが、自分のこだわりのためにやったことなのにいい人みたいにいわれることが多かったので気に食わない。

「あたいまえのことをしただけなんだ。そんな感謝されてもしょうがない。」

これだけははっきりいっておかなくては。

しかしそうやっていったのに逆効果な時もある。

「しかもすごく検挙で偉いとは・・・。この世界にもまだこんな若者がいたか。」

「だからやめてください。おれ目立つのは嫌いなんで・・・。」

そうおれはいったが王様はやめなかった。

それにそれをみたほかの人々も次々におれを硝酸し、ほめたたえた。

こんな全然大したことない当たり前のことでほめられるのはちょっと複雑な気分だ。

この世界にはそんなこともできないくずが多いのだろうか。
「とにかくあんたは本当の嘆(ほんもののおとこ)だとおもう。にげていった宰相はくずだが・・・。」
おれは本心からいったのに王様慌てた。
「いっいや大臣だってあれはすごくいいところがあるしとても有能なのだ！だからすぐに許してやれ！」
「なんだって！？」
どうしてこんな焼土下座する勇気ある人があんなくずの大臣をかばうのだろうか。
「なんならもっかい焼土下座をしてもよい！むしろ王様にいい気味だからさせてくれ！だからわし・・じゃなかった宰相をゆるしてほしい！」
今なにか鷲とかいってなかったか？この世界には猛禽類いるんだろうか？
そんなとりとめもないことを考えながら、おれはしかたなくうなづいた。
「今回だけ特別ですからね」
「やっやった！感謝するぞグへへへへ。」
「グへへへへ？」
「いっいやなんでもない。感謝するのじゃ！」
そのときおれは鋭い第六巻で異常を関知したが、あんまり無礼だと失礼だとおもわれるとおもって、いわなかった。
「そっそれよりおれはあんたが気に入った。何かひとつだけならお手伝いしますよ？」
すると王様はびっくりして思わず口をすべらしてしまったみたいにいった。
「なんとっそれはしめたことじゃ！　見たところこの坊主の力は協

力無比！！王様を魔法具であやつって傀儡人形（かいらいにんぎょう）にしたてあげた絵画あったわい！！」
「えっいまなにかいったか？」
「いっいやっ！なにもいっておらんぞ！とっとにかくくれぐれも宰相を悪くいってはならんぞ！」
「まっいいけど」
おれはすぐにあきらめた。

実はこの言葉はおれの考えがあっての言葉だ。
おれは前の世界では強すぎて退廃な人生を送っていた。
けれどこの世界なら強い敵がいるはずだ。
たとえばあの・・・『ダークブラックシャドウドラゴン』のような・・・。

まあそんなに強いのはいないだろうが、この王様に困ったことがあるならそこに強いやつがいる確立は高い。
すると王様はいった。

「じつは、おぬしには『ダークブラックシャドウドラゴン』を退児してほしい。」

なんてこった・・・。
『ダークブラックシャドウドラゴン』。
おれの宿命のライバル同士は、ここでも立ちふさがるのか・・・！？

それから王様はこの国の苦しい実情を語ってくれた。
「じつはここから三日ほど町の右のほうのダンジョンに、『ダークブラックシャドウドラゴン』は住んでいて領民たちを常に三日三晩苦しめている。わしらはなんども倒そうと頑張ったのじゃが並みの精鋭ではまるで歯が立たない。そこでレイヤ、おぬしの出番なのじゃ！」
「なるほどっ。なんの罪もない国民が、しいたけられて（なぜか変換できない）いるなら、おれがイカ猿を得ないなっ！」
世界で一番わるいことは、弱くて自分の力で自分の力で自分を守れないやつらをしいたけることだ。

そういう弱いやつを圧倒的な力の差で倒して喜んでいるようなやつがおれは大嫌いだった。
おれのように強さの果てに行ったものならだれだってわかっている。
本当に強いやつは心が強いだけであって、その強さは力ではない。

だからそれがわからない弱いやつを倒しておれが強いと思ってる弱いやつをおれが弱いやつを倒すおまえの方が弱いやつなのだと真実を告げて、おれが圧倒的な力の差で倒してやることがおれの最高の喜びで生きがいだった。

おれは悪の手先を倒す喜びにもえていたが、そのとき、宰相（グッヘッヘばかめ。実は『ダークブラックシャドウドラゴン』はなにも悪いことはしていなく、わしらが勝手に財宝ねらいで責めていったのを返り討ちしてるだけじゃが坊主はそんなことしるよしもない。もし坊主がにっくきあの『ダークブラックシャドウドラゴ

ン』を倒したらわしらが財宝は独り占めし放題じゃ！）
そんなことを大臣がおもっているとはしるよしもなかった。

そこでいよいよ『ダークブラックシャドウドラゴン』との因縁の対決がスタートしたが、おれはまず、女たちを説得しなくてはいけなかった。
「お前たちをつれてはいけない。いままでいっしょに色々な冒険をしてきたが、今回ばかりは危険なんだ。わかってくれ。」
リスティーナもエイファシアもふたりともすごい美人でおれがいなければまっとうな人生を歩んでいけるかもしれない人材だ。
ここで無貌な戦いにいどむのは、あん黒龍という危険を犯すのはおれだけでいい。

そんあ風におれはおもったのだ。
だが、おれがおもったよりふたりの決意は難かった。

「わたしはレイヤ様の奴隷ですっ！！なのに・・・なのにどんな危険な場所にもついていかれなければ奴隷とはいえませんっ！！」
リスティーナが涙ながらにうったえる。
「もしひとりでイクというなら、まずわたしを殺してからイッてください！！」
「リスティーナ・・・」
こんなにおれのことをおもってくれたのか。
おれはただただリスティーナに勘当した。

「わかったよ。だが、ひとつだけ訂正してくれ。」
「え？」
「おれにとってきみは奴隷なんかじゃない。美人で花蓮な、おれの最愛の奴隷だよ・・・。」
「れっレイヤさま・・・／／／／」
おれとリスティーナはどちらからともなく見つめあう。
その唇が、どちらからともなくちかづいて・・・。

「アッアン、キモチイイ！！　たまんない・・！」
「そっそんな・・・かっ堪忍してー！！」
「らっらめー！！　とんじゃうー！！」

「アッアン、こんなのくせになっちゃう・・・。」
満足してリスティーナを話したおれだが、まだエイファシアの説得が残っていた。

「・・・またせたな。」
「べっべつにっ！いま来たところよっ！」
最初からずっといっしょの部屋にいたからバレバレなのだがそんな健気なことをいうエイファシアにおれはかわいいとおもったが、ぐっとガマンする。
奴隷だったリスティーナと違い、エイファシスはもともとこの国でちゃんと居場所を持っていた人間だ。
おれにつきあって無貌なチャレンジに望むべきじゃない。

「さっきもいったが危険なんだ。お前はただの受付場にもどれ。」
「イヤよっ！わたしはご主人様の愛にふれて世界を変えました。もうあなたのいない生活になんて絶えられないっ！」
「だがっ！」
「それにっわたしは精霊魔法が使えますご主人様っ！ぜったいに足手まといにはなりません！」
「なにっ精霊魔法！？」
精霊魔法は太陽戦死などの特殊な職業でなければエルフだけが仕える特別な魔法だ。
その破壊力は絶大につきるといわれている。

「しかも使えるのは闇属性の超光魔法よ！」
「なにっ！」
あまりしられていないことだが、闇と光は表裏一体である。
闇があるところに光があり、光があるところに闇があるからだ。
しかし、その技術を体得するには凄まじい修業と、何よりすごい

才能が必要なはずだ。

「もし本当に闇の超光魔法が使えるなら、たしかに・・・・。」
それを訊いて、エイファシスの目が光線的に光った。
戦闘体制になったとおれにはきずいた。
「なら、ためしてみる？」
エイファシアの言葉に、おれも構えをとる。
「そうだな、いくぞっ！！」
おれはさけび、おれたちは全力でぶつかりあって・・・・。

「アッアン、キモチイイ！！　たまんない・・・！」
「そっそんな・・・かっ堪忍してー！！」
「らっらめー！！　とんじゃうー！！」

「アッアン、こんなのくせになっちゃう・・・。」
おれはベッドに倒れるエイファシアを見てつぶやいた。
「たしかに、なかなかの強敵だった・・・。」
残念ながら精霊魔法を見るヒマはなかったがこれだけ凄ければ大丈夫だろう。たぶん。

こうしてふたりともつれていくことになった。

三人で連れ立って町を出る。
守衛の男が美人ふたりと密着しながら歩いていくおれをすごく羨ましそうに見ていたのが印象敵だった。
まっどんなに見ててもふたりは身も心もおれのもんなんだけどねwww

「そういえば、エイファシアの強さはなんとなくわかったが、リスティーナは何ができるんだ？」
おれは洞窟にいく途中でそんなこと聞いた。
ふつうの人なら洞窟までの道は過酷で苦しいのでおしゃべりなんてできないが、おれにはもちろん赤子に手をひねられるよりも造作もないことだったのだ。

「はっはい。わたしはもともと王じょ・・・いっいえっ特殊な生まれだったので、ひととうりのことはできます。」

「ひととうりというと？」
「はっはい。剣術棒術体術魔術針術精霊術変装術奇術柔術舞空術秘術美術手術に節約術、全てＳランク相当の腕前です！」
「それは・・・すごいな。」
それが本当なら、リスティーナはどんな状況でもＳランク以上のはたらきができるということだ。暗酷龍に通用するかはともかく、すくなくとも奴隷商人とかにつかまりそうになっても自力で倒せる程度には強いようだ。

それにしても、さっきリスティーナは『王じょ・・・』のあとなんていいかけたのだろうか。
いいかけたというかもうすでに全部いっちゃってる気もしたが、よくわからなかった。
「それで、逆に弱点とかはないのか？」
「じゃっ弱点ですか？その、いまはこのカッコウなので、その、風魔法とかが・・・。」
おれの質問にメイド服のスカートをおさえながら、真っ赤になって応えるリスティーナ。
どうゆう意味か殺那の間だけ考えて、すぐに応えは出た。

「ああっそうか。リスティーナはいまノーパ…「レイヤ様のバカァ！！」」

台詞の途中でものすごい右ストレートがおれを襲った。
「い、いいパンチだったぜ・・・ガクッ。」
おれはそれだけいいのこして倒れた。

うん、リスティーナもこれだけ凄ければ大丈夫だろう。たぶん。

「そういえば、レイヤ様はまだレベル１なんですよね？」
「えっあんなにすごいのにレベル１なのっありえないっ！」
エイファシアはびっくり仰天したが、真実は残酷なのだ。

本当だよといおうと自分のステータスを見て、おれはあっと驚いた。
「あっなんだこれはっ！」
おれは自分のステータスを見てあっと驚いた。

おれはびっくり仰天したのだが、
「れっレベルがいっきに５０になってるっ！！」
どおいうことだ？
太陽戦士はものすごくレベルがあがりにくい辛い職業だから、ゲームでやってたときは悪徳プレイヤーを湯水のように倒してやっとレベル２になるくらいのだったのに・・・。

「あっそうか経験地１００倍っ！！」
おれは神様に願ったことを思い出した。
これはそのおかげの効果か。
たしかにＡランクとかを一気に倒せば０・５レベルくらいは経験地が入るかもしれないからそれが百倍になった結果がこれなのだ。

「もし千倍っていってたら一気に五百レベルか・・・。」
一気に成長限界を超える成長を遂げるところだった。
やっぱりチーとは危険だ。

そういうのがあると、すぐにチーとに頼りきる人間になってしまう。
おれはこの前の自分の決断の正しさに感謝した。
「しかしレベル1じゃなくなったのはよかったな・・・。」
やはりレベル一だと雑魚やくずに侮られる人生は好きじゃない。
そうおれがにやにやしていると、だがそのときおれの耳には異常な音声を感じた。
――あーしまったなー。レベル1じゃなくなったからチンピラのやられ台詞使い回しできなくなっちゃったなー。あたらしいやられ台詞考えるのめんどいなー。
「なっなにものだっ！すがたをあらわせ！」
おれがさけぶと姿は洗わさなかったが、正体は見せた。
――あ、見つかっちゃったか。こんちわー天の声です。
天の声？天の声・・・あっ！
オマエ天の声っていうかただの作者だろ！？
――ダメだよーそういうのはーきずいてないふりしないとー。
うるせぇ！！てゆーか馬鹿作者！
てめえのせいでおれはこんなわけのわからん星に飛ばされて苦労してるんだからな！！
――いやーめんごめんご。
謝る謝罪にぜんぜん誠意がかんじあれねえ！！
そもそもいきなりヒロインキャラとか増やしちゃってちゃんと掻き分けできるのかよ！！
まだ3話なのにヒロインふたりとなかよくなりすぎてすでにちょ

っと修羅場っぽいかんじだぞ！？

――それがちょっと困ってるんだよねー。でもヒロインはそれぞれ魅力的だから減らそうとはおもってないよ！むしろもっと増える予定ｗｗ

このダメ作者！くず作者！気取るんじゃねえよ英検四級落ちたくせに！！

――英検のことはいいっこなしだろ！おっおっと、つづき書かなきゃ・・・。じゃーねー！！

二度とくんな！！

おれが天の声こと作者（たくさんの読者様が待ってるのに更新スピードをあげないなまけモノ。まあでもそんな生獣だけどいいところもあるよ？）をしっしとおいはらっていると、エイファシアたちに変な顔をされた。

「どっどうかしたんですかっご主人様！？」

そういえばふたりがいたのを忘れていた。

おれはすっかり天に向かってひとりごとをいう変な人になっていた。

「なっなんでもないなんでもない。」

おれは必至でごまかした。

「なんでもないならいいですけども・・・。」

エイファシスは不満そうだったがしぶしぶと同意した。

もうひとり、リスティーナは、

「レイヤ様？あんまりメタなことばかりいってると読者がついてこれませんよ？」

「えっ？いまなんてっ？」

「いいえ、なんでも。行きましょうレイヤ様。」
何事もなかったように歩き出すリスティーナ。
もしかするとリスティーナが一番恐ろしい存在なのではないだろうかとおれはおもった。

そんなこんなでダンジョンのおく。
そこに、やつはいた。
果てのないほどの暗さ、そして黒さ。
漆喰よりも暗い、そして昏い闇の獣が、いま、目覚めの刻を向かえようとしていた。

――『ダークブラックシャドウドラゴン』。

かつてある王国を死に至らしめ、今なお数多の伝説に語られる埼京の龍が、おれたちの目の前に立っていた。
「あっこれはっ！？」

「あっ足がうごかないっ！？」

おれのうしろでリスティーナとエイファシアが足をすくませていた。

しかし無理もない。

その信じられないほど大きくて巨大な巨体からは凡人であればその姿を見ただけでショック死してただちに絶命して命を落とす程度のオーラがにじみ出ていた。

さらに、悪いことは重なるものだ。

「すぐに・・・たちされ！」

それだけではなく、巨体から虚ろな声が聞こえる。

「おろかな・・・人間よ。いまならとくべつに・・・殺すのは勘弁して・・・やるぞ？」

ここでただの凡人かくずなら恐怖でしゃべることもできずに失禁しながら命乞いをして泣きさけんだだろう。

だが、おれは・・・凡人なんかではなかった。

いや、そんなことはありえなかった！

「残念だったな・・・。おれは、おまえみたいに命を大切にしないやつがだいっきらいなんだよ！！」

――こうして、戦いの火豚が切って卸された！！！

転生3．ｖｓ最強のあん黒龍との対決！！　その１（後書き）

長くなりすぎちゃったのでここでカット！！
次回は戦闘戦闘また戦闘のバトル会になる予感！！

つづきは・・・・・いい感想がいっぱいは行ったら書くかもねー？？
悪い乾燥は・・・・・ダメー！！

ｂｙ天の声こと”闇の中でこそ光る闇色の漆黒”ブラックファントム・ゼロ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4021z/

零夜の奇妙な転生

2011年12月16日20時08分発行